

第3刊  
2014.02.25

文芸島に迷い込んだ旅人たちへ

# 月刊イトランセ

陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆきます。

【特集】

お前の頭がライトなノベルだな

【読切短編】

不撓不屈

ひかり / イラスト 雪見ダイフク

【連載】

レストラン・グラフィティ scene2

Q / イラスト 篠屋

フィッツロビンと無垢な自百合 episode2

竹見名央 / イラスト えりな



## 巻頭カラー

---

フィッツロビンと無垢な白百合 episode2

竹見名央 / イラスト えりな



不撓不屈

ひかり / イラスト 雪見ダイフク



レストラン・グラフィティ scene2 成瀬と丹波

Q / イラスト 篠屋



エトランゼは、情報誌と文芸誌の特色を併せ持った月刊ムック誌になります。

メインコンテンツとして、連載ライトノベルを数作品ずつ掲載するほか、サブコンテンツとして、陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆく予定です。

## KMITの既刊誌 好評販売中！

お求めの際はこちらのアドレスまで [kmit.kemmy@gmail.com](mailto:kmit.kemmy@gmail.com)

電子書籍もあります。

## 次刊予告

*連載3 タイトル掲載予定*

【連載】 **CCC**（クロノクロスクロニクル） 第二幕 修平

【連載】 痣井紅太郎シリーズ 紅妹タルト第三弾 城野伊織

【連載】 カラカラ 第二話 霜山モリス





森

ひかり

雪見ダイフク

illust

大 大 大 大  
大 大 大 大  
大 大 大 大



キャラ紹介だよ

【神田夏子】



小学六年生の女の子。  
父と二人で暮らしている。

【加藤樹理奈】



夏子の親友。  
裕福な家庭の子供。

### story

小学六年生の春、お母さんがいなくなった。  
なんの前触れも無く崩れ去った今までの日々。  
実感のないまま始まった新しい日常。  
その中で、夏子は様々な人と出会い、成長してゆく。

小学六年生の春、わたしの苗字は里村から神田に変わった。わたしは、よっしゃ、これでクラスの奴らから「サトイモ」と呼ばれてからかわれることはなくなるぞ、と喜んだ。

わたしの母は、ある日突然、離婚届に署名、捺印しわたしを置いて出ていった。わたしが学校から帰って来ると、リビングのテーブルに、背中を丸めて座る父の姿があった。わたしがただいま、と声を掛けても父は項垂れたまま、何も言わなかった。

「お父さん、お母さんは？」

「いなくなった」

「どこ行ったの？」

「分からない」

「いつ帰ってくるの？」

「分からない。俺には何も、わからない」

母が出ていったその晩、父は次々と缶ビールを空け、「夏子お、俺はこれからどうしたらいいんだあ」と涙を流し、床をのたうち回った挙句激しい酩酊をかいて爆睡した。わたしは初めて見る父のそんな姿に、驚いたというより、恐ろしさを感じた。わたしは泣かなかった。

それからわたしと父の二人きりの生活が始まった。父は慣れない家事を一生懸命こなそうとしたが毎回失敗した。朝食に卵焼きとトーストを用意しようとするれば、卵焼きに気を取られているうちにトーストを焦がし、ワイシャツにシミを作った。アイロンをかければ、シャツに余計なシワを作り、項垂れた。そのうち、食卓にはお惣菜やコンビニ弁当が並ぶようになった。父が会社帰りに買ってくるのだ。わたしはそのお惣菜やコンビニ弁当をお皿に移し替えてテーブルに並べた。

「こうすれば、コンビニ弁当の味気無さも少しはマシになるね」

「夏子、ごめんなあ」

父はそう言って二本目の缶ビールを空けた。

父と母は職場結婚だった。一人娘だった母と結婚した父はお婿さんに入り、母方の実家で暮らしていたが、わたしが生まれてこのマンションに引っ越し、母は仕事を辞めて専業主婦になり、親子三人での暮らしが始まった。父と母が夫婦喧嘩をしているところをわたしは見たことがなかった。父は、毎日の仕事で疲れていても、土日になればわたしと母を連れてドライブに連れて行ってくれたし、母は少々わがままなところはあったが、優しくて明るい人だった。

そんな母が、出て行った。父と、わたしを置いて。わたしは実感が持てず、明日か明後日にでもなれば、母はこの家に帰って来るような気がしていた。

新しいクラスの名簿に、わたしの名前は「神田夏子」と記されていた。ああ、なんてしゃれた名字！ もう誰にもサトイモなんて呼ばせないわ。わたしは生まれて初めて父の娘に生まれてよかったと思った。夏子っていうのがちょっとダサいけど。

わたしの前の席の椅子には「加藤樹里奈」という名前シールが貼られている。樹里奈という可愛らしく垢抜けた名前にわたしはドキドキした。どんな女の子なのだろう。きっと可愛いに違いない。わたしはまだ見ぬ「加藤樹里奈」の姿を想像し、胸を躍らせた。が、現れたのは、丸々太った女の子だった。樹里奈は窮屈そうに背負っていたランドセルを肩から下ろし、それを片手で軽々と持ち上げ、机の横に掛けた。そしてそのふくよかな尻で深く椅子に腰かけて辺りを見回し、くるりとわたしを振り返り、「わたし加藤樹里奈！ よろしくね」と快活に自己紹介をしてにっこり笑った。真ん丸な顔の中央に付いた、これまた真ん丸な鼻が可愛いなと思った。彼女の突然のご挨拶に戸惑いながらも、わたしもわたしで「神田です。よろしく」と新しい名字を得意気に名乗った。他のクラスメイトにはぴったりなサイズの椅子は、樹里奈が座るとミニチュアサイズに見えた。重いだろうな、椅子。わたしは樹里奈の丸い背中を見つめて、心の中で「踏ん張れよ」と樹里奈の椅子にエールを送った。

席が前後ということもあって、わたしと樹里奈はすぐに仲良くなった。丸々と太っている樹里奈と、小学六年生にしては小柄で華奢なわたしのコンビはどうも不釣り合いで、クラスの男子からは「デブとチビ」とからかわれたが、樹里奈は「男子ってコドモよね」と笑い飛ばし「今日の給食はナポリタンだってね」と嬉しそうに笑い、口の周りがケチャップで赤くなっているのも気にせずにとくさん食べた。

わたしたちは放課後になると、グラウンドで素振りをする野球部やパス練習をするサッカー部を尻目にそそくさと下校し、子どもだけで出入りすることを禁止されているショッピングモールのフードコートへ行った。樹里奈はビッグサイズのハンバーガーとフライドポテトとコーラを注文し、はふはふ言いながらそれらを頬張った。わたしはフライドポテトとサラダを注文して、樹里奈の食いっぷりに感心しながら食べた。わたしが樹里奈に「野菜は食べないの？」と聞くと、彼女は「フライドポテトを食べてるよ」と、ふくふくした頬を持ち上げて笑った。フライドポテトを野菜だと言い出したらもうだめだと、樹里奈の靴下のゴムに乗ったふくらはぎの肉を見ながら思った。彼女はわたしが食べきれなかったフライドポテトもぺろりと平らげ、油でぎとぎとに濡れた指先をひと舐めしてからこう言った。

「なっちゃん、次はクレープを食べよう」





## 本編（2）

---

わたしと父が出来合いの惣菜ばかり食べていることを知ると「私の出番が来たわね」とでもいうように、祖母、つまり父の母がマンションにやってきてご飯の支度や掃除、洗濯などあれこれ世話を焼いた。

「なっちゃんももう六年生なんだから、お料理くらいできるようにならなきゃねえ。ほんとに、理恵さんはなっちゃんに何にも教えないで……」

祖母はわたしへの不満も母への不満に変えた。わたしはそのたびに肩をすぼめて「うん」と小さく頷きながらも、祖母の背中にあっかんべーをした。

「あの人、小さい頃から甘やかされて育ってきたんでしょう。だからこんなことになるのよ」

祖母が母の文句を言うたびに、父は「やめろよ夏子の前で」と祖母を制したが、そこまで怒っている声ではなかった。

父の帰りが遅い日は、祖母とふたりで夕食を食べた。祖母はわたしが好きなものを何でも作ってくれたし、美味しかったが、食事中によく母の悪口を言った。祖母が母をなじるたびに、わたしの口の中は渴き、ご飯の味がよくわからなくなった。

「あの方はねえ、あんたを捨てたんだよ」

祖母の口の中のご飯がちらちらと見えて汚かった。

樹里奈は幼稚園の頃からピアノを習っていて、わたしを家に招待すると必ずピアノを弾いてくれる。しかし彼女のピアノの腕はお世辞にも上手いとは言えない。途中で何度もつかえながら鼻息を荒げてなんとか一曲弾き終わり、わたしを振り返って「どう？ うまいでしょ？」と言わんばかりの視線を送ってくる。そのたびにわたしは「ブラボー！」と叫んで彼女に拍手を送らなければならなかった。そうしているうちに樹里奈のお母さんがお手製のお菓子と、フルーツの甘い香りがする紅茶を部屋まで持ってきてくれる。樹里奈のお母さんも樹里奈同様ふくよかな体型をしており、おっとりした柔らかい雰囲気の人だ。樹里奈の家は二階建ての大きな家で、バルコニーもついている。リビングには、樹里奈のお父さんが好きで集めているワインが飾られていて、うちにはない高級感がある。樹里奈の部屋は、淡いピンクの壁に白を基調とした家具で統一されており、お姫様の部屋を連想させるもので、わたしはうっとりしたが、部屋の主がその丸い身体でドシンドシンと歩き回るアンバランスさは滑稽でもあった。

「なっちゃんのお母さんは、お菓子とか作ってくれないの？」

樹里奈は右手のチョコチップクッキーを頬張り、左手にマドレーヌを持ちながら訊いた。

「うちはお母さんいないんだ。この前出て行っちゃった」

わたしはチョコチップクッキーを一口かじった。バターの香りとチョコの甘さが口の中に広がる。

「ええっ」

樹里奈は大きな目を更に大きくして大げさにうろたえて見せたあと、わたしに顔を近づけて訊いた。



「じゃあ、ご飯とかはどうしてるの？」

「おばあちゃんが来て作ってくれるよ。そうじゃない日はお弁当を買ったり……」

わたしがそこまで言うと、樹里奈はわたしの手を取って、「わたしでよかったら、いつでも頼ってね」と目にうっすらと涙さえ浮かべて、白いふくよかな手でわたしの手を強く握った。両親の愛情をたっぷり受けて育った樹里奈が、わたしの話のどこにシンパシーを感じたのかは分からないが、樹里奈の柔らかい手から伝わる体温は心地よかった。樹里奈がダイエットを決意した時には、全力で応援しようと思った。

## 2

父と祖母は、わたしに何かを隠している。夕食の後、わたしがリビングで漢字の書き取りの宿題をしていると、祖母に「なっちゃん、ちょっと部屋に行っておきなさい」と言われた。わたしは「はい」と返事をして部屋に行くふりをして、リビングのドアを少し開けて二人の話を聞いていた。何か訳がありそうな顔で部屋に行ってると言われて素直に従うほど、十二歳は子どもではない。二人は真剣な顔つきでぼそぼそと何か話し込んでいたが、よく聞こえなかった。唯一聞き取れた言葉は、「母親」だった。

次の日の夕食の時、「夏子に、会ってほしい人がいるんだ」と父に言われた。わたしは「ふーん、わかった」とどうでもいいふうを装った返事をした。

佐和子さんと初めて会ったのは、マンションから車で少し走ったところにあるフレンチレストランだった。佐和子さんを見たとき、わたしは父の再婚を確信し、この人がわたしの新しいお母さんになるんだなと思った。

「夏子ちゃん、初めまして」

佐和子さんはわたしの目の高さにあわせて屈み、微笑んだ。身体の線が細い、色の白い女の人だった。彼女の大きな瞳に見つめられて、わたしは「こんにちは」と挨拶するのが精一杯だった。わたしたち三人はコース料理を頼んだ。ナイフとフォークが上手く使えず、わたしはフォークを右手から左手に持ち替えたり、左手から右手に持ち替えたりと弄びながら、ガチャガチャと音を立てて牛肉の赤ワイン煮をなんとか完食した。デザートのカレー・ブリュレが運ばれてくる頃にはわたしはすっかり疲れきっていて、早く帰りたいとそわそわし、水ばかり沢山飲んだ。

佐和子さんを見る時の父の目は、わたしを見る時とは違った種類の優しさを持っていた。

父のそんな顔を見るたびに、心臓を鷲掴みされたような気持ちになり、次々に料理を口に詰め込んだ。

帰りの車の中で、わたしはブラウスの袖にシミがついているのに気づいた。ワイン煮を食べている時に汚してしまったのだ。このブラウスは、去年の誕生日に母が買ってくれたものだ。そろそろ肩のあたりがきついし、袖も短くなってきたように感じる。

「夏子、料理美味かったか」

ルームミラー越しに父と目が合う。

「うん。でも、わたしはファミレスのハンバーグの方が好きかな」

そう言うと、父は笑った。いつもわたしに向けている父の笑顔だった。

祖母が言うように、わたしは母に捨てられたのだろう。母のことを、忘れたわけではない。嫌いになったわけでもない。でも、佐和子さんを、父が好きになった人を、わたしも好きになろうと思った。同時に、母はもう帰ってこないんだなとも思い、その夜わたしは布団の中で声を殺して泣いた。母が出て行ってから泣くのは、これが初めてだった。

佐和子さんは、わたしたちのマンションに頻繁にやって来るようになり、祖母が来る回数は減った。佐和子さんはお世辞にも料理上手とはいえず、特に鶏の唐揚げは最悪で、まるでセミの抜け殻を嚙んでいるような気分させられた。

樹里奈に佐和子さんのことを話すと、「なっちゃん、それはままははってやつだね」と言った。

「ままははって、シンデレラとか、白雪姫の？」

「そうだよ。なっちゃん、その人に意地悪されても負けちゃだめだよ」

樹里奈は険しい顔でわたしにそう言ったが、佐和子さんは優しそうな人だったからその心配はないだろうし、もし意地悪をされても、打ちひしがれたりめそめそしたりするもんか、と思った。

それから少し経って、父と佐和子さんは夫婦になった。佐和子さんには連れ子がいた。詩穂という女の子で、わたしよりも十歳も年下の二歳だった。血のつながりはないけれど、初めてできた姉妹である詩穂は可愛かった。父は、実の子であるわたしにも、佐和子さんの連れ子の詩穂にも、同じくらい愛情を注いだ。詩穂に新しいおもちゃを買ってあげる時にはわたしにも新しい文房具や本を買ってくれたし、詩穂をベビーカーに乗せて散歩に連れて行ったあとは、わたしの学校での話を聞いてくれた。しかし、佐和子さんは違った。と、わたしには感じられた。意地悪をされるわけではない。でも、わたしと詩穂の間には、目に見えない境界がある。わたしは、詩穂はわたしよりもうんと小さいから、手がかかるのは仕方ないと諦めつつも、心のどこかでは、佐和子さんを許すことができていなかったし、「お母さん」と呼ぶこともできなかった。佐和子さんも、どこかわたしに気がつかっていた。疎外感の中で、時々、母の夢を見た。それはわたしを、懐かしく、さみしい気持ちにさせた。母の夢を見るたびに、彼女を思い出すたびに、さみしさは層のように積もっていった。キッチンに立つ佐和子さんを母の後ろ姿と重ねて見てしまい、抱きついて甘えたくなくても、できなかった。

### 3

夏休みも中盤に差し掛かる頃、わたしは樹里奈と家出を実行した。

その日は日曜日で、わたしはリビングのテーブルに座って、佐和子さんが朝食に焼いた粉っぽいホットケーキをココアで喉の奥に流し込んでいた。詩穂はリビングのカーペットに座って、積木で遊んでいる。その後ろ姿が、ぬいぐるみが座っているようで可愛らしい。

「詩穂、おいで」

わたしがそう呼ぶと、詩穂はべろべろ舐めていた積木を放り投げてわたしのもとへ這って来た。その時わたしは肘でココアの入ったコップを倒してしまった。テーブルから熱いココアがぼたぼたと垂れ、床を這っている詩穂にかかりそうになる。それに気づいた佐和子さんは、わたしには見向きもせず詩穂のもとへ走っていき「ちょっと！ あぶないじゃない！ 詩穂が火傷したらどうするのよ！」と激しくわたしを怒鳴りつけ、詩穂を抱きかかえた。そしてすぐにハッと我に返り、気まずそうにわたしから目をそらした。驚いた詩穂が泣き叫ぶ。詩穂とわたしの違いを思い知らされた気がして、鼻の奥が痛くなり、顔が熱くなった。わたしは佐和子さんの本当の娘ではなく、「夫の娘」。ほらね。結局そうなんですよ。わたしはそのまま家を飛び出し樹里奈の家へ走った。彼女はわたしの泣き顔を見て何を思ったのかは分からないが「なっちゃん、家出しよう」とあっさり言った。

「でも、樹里奈、お母さんにおこられちゃうよ」

「ちょうどわたしも家出したかったんだ」

樹里奈に家出をしたい理由を尋ねると、樹里奈は「朝顔を枯らしちゃって、観察の宿題ができないから」とニッと笑った。彼女を巻き込んではいけない。そう思いつつも、樹里奈とどこか遠くへいきたいと思ったし、彼女とならどこへでも行ける気がした。

樹里奈の家を出て、蝉の鳴き声を疎ましく思いながら駅を目指して歩いた。商店街を通り抜け、駅まで来たところで、樹里奈が「暑いし、疲れた」と息を切らしたのでバス停のベンチに座って休憩を取った。そしてちょうど来たバスに当てもなく乗り、適当なところで降りた。周りには田んぼが広がっていて、民家がぽつぽつあるだけだった。わたしは何も持たずに家を飛び出してきたので、運賃は樹里奈に払ってもらった。バスを降りてぶらぶら歩いていると、樹里奈がそわそわし始めた。

「どうしたの樹里奈」

「トイレに行きたい」

「ええーっ。トイレなんてないよ。もう少し我慢できない？」

「もう無理、もう無理！」

樹里奈が「もれる、もれる」と騒ぎ出したので、仕方がなく見知らぬ民家でトイレを借りることにした。「この家で借りよう」と樹里奈が指さしたのは、木造の古い家だった。樹里奈は臆することなく玄関の戸を開き「こんにちは！」と家の奥に声をかけた。返事はないが、テレビが点いている気配はある。樹里奈は図々しくも靴を脱いで中へ入って行ったのでわたしも続いて靴を脱いだ。茶の間のテーブルには白髪頭を逆立てた老人が鎮座していて、大音量のテレビをぼんやりと眺めていた。

「あの、すみません、トイレ貸してください」

返事はない。

「トイレ、貸してください！」

もう我慢ならないのか樹里奈は茶の間を通り抜けて廊下へ出た。

「あの人、おじいさんかな？ おばあさんかな？」

「おばあさんじゃないかな？ 湯呑の色がピンクだから」

家の廊下は樹里奈には少々狭く、何十年間も踏まれ続けてきたであろう古びた床は、樹里奈の体重にギシギシと悲鳴を上げている。トイレを見つけて用を足し終えた樹里奈は「水が流れないトイレだった」と顔をしかめた。わたしたちが「ありがとうございます」と言うと、老人は何かをブツブツ呟いているだけで、わたしたちの方には見向きもしなかったが、わたしたちは何度も頭を下げ、家を出た。トイレを済ませてすっきりすると、お腹が空いたのか、樹里奈は「コンビニとかないかな」と言った。どうやらわたしたちはだいぶ田舎に来てしまったらしく、コンビニどころか自動販売機すら見当たらない。

「わたしたちこのまま野垂れ死ぬのかな」

樹里奈は眉間に皺を寄せ、わたしを見つめて、今にも泣きそうなくらい弱々しい声で呟いた。汗で前髪がおでこに張り付いている。もしこのまま食べ物にありつけず飢え死にの危機にさらされても、樹里奈は死なないだろうかと、彼女のふくよかな身体を見て思った。

結局わたしたちはそれからしばらく歩き回った挙句、その日のうちに樹里奈のお父さんによって保護された。ずいぶん遠くまで来てしまったと途方に暮れていたわたしたちが歩き回っていた場所は隣町で、わたしの家や樹里奈の家からそう遠くはなかった。わたしは拍子抜けしてしまって、クーラーの効いた樹里奈のお父さんの車に揺られながらとうとうとした。彼はわたしと樹里奈に「今日はずいぶんと冒険したんだね」と笑った。樹里奈は家に着くまで「お腹空いた」を連呼していた。

家に帰ると、父には叱られたが、佐和子さんには「無事でよかった」と頭を撫でられた。わたしが樹里奈と路頭に迷っていた時、佐和さんはわたしが行きそうな場所に車を走らせたり、クラスの連絡網を使ってあちこちに電話をかけたりしたそうだ。それを知ってわたしは急に泣きたくなくなり、半べそをかいて「ごめんなさい」と謝り、佐和さんが作ったパサパサの鶏の唐揚げを頬張った。樹里奈、朝顔の観察日記はどうするのだろう、と考えながら。

#### 4

夏休みの最終日、樹里奈から、「夏休みの宿題が終わらないから一緒にやろう」と電話が来たので樹里奈の家まで行った。

「終わってない宿題って、朝顔の観察日記？」

「まさか。それはもう諦めた。枯れたんだもん、できるわけないじゃん。習字よ習字。どうして夏休みに、書初めみたいなことしなきゃいけないのよ」

樹里奈は文句を言いながらお習字セットを出した。わたしたちの担任の先生は「二学期の自分の目標を習字で書いてくること」という宿題を出した。

わたしは樹里奈のお習字セットを借りて、ピンク色の可愛いカーペットに墨を飛ばさないように注意しながら、下手くそな字で「不撓不屈」と書いた。

「なっちゃん、それ何て読むの？」

「ふとうふくつ」

「何それー？ 豆腐みたーい」

お菓子と紅茶を持って部屋に入ってきた樹里奈のお母さんに「夏子ちゃん、難しい言葉知って

るのね。でも『撓』の字、線が一本足りないわよ」と言われ、わたしと樹里奈は顔を見合わせて笑った。

## 【特集】お前の頭がライトなノベルだな

---



お前の頭がライトなノベルだな！



.....いきなりどうしたんですか



いやあ、巷で噂の「女子に言われたい台詞ランキング」で1位だっってきたから



エトランゼよりもやばいこと載せるサークル誌なんて見たことないです



え？ 堂々と威張れるほど怖いことなんて、一つも載ってないくせに☆



(あなたが一番こわいです.....)

## 【特集】 お前の頭がライトなノベルだな

「お前の頭がライトなノベルだな」とは：

某Twitterアカウントのbotに定期で呟かれている言葉。

そのプロフィールに書かれた解説によれば、

「物書きの自虐ネタ的つぶやき」とのこと。

無論、どこの誰が初めに言い出した言葉なのかは不明。

KMIT編集部の某担当が非常に気に入っている。

お前の頭がライトなノベルだな  
～特別書き下ろし短編～

「お前の頭がライトなノベルだな」

ライトノベルを書きたいと言い出した友人に、僕はそう言った。

馬鹿馬鹿しいこと、この上ない。友人は物書きと言うものを舐めている。僕はそう思った。

「しかしよ、しかし、七崎よ。ライトノベルってのは、どこからどこまでのことを言うんだ？」

僕のことを七崎と呼ぶ友人は言う。

ライトノベルの定義、ねえ。

「どこからってというのは分かるが、どこまでってというのはどういうことだ。それじゃあまるで、ライトノベルに先があるみたいじゃないか」

「ほら、最近漫画とノベルスが両方乗ってる作品の形式なんかもあるじゃねえか。あれなんかもライトノベルに入るのかねえ？」

「入るだろ。イラストがあってノベルスがあれば、十二分にラノベだ」

ふんふん、と友人は頷く。さして興味もないらしい。

自分から話を振ってきて……。身勝手なヤツだと思う。

「とにかく俺はライトノベルが書きたいんだよ」

「書けば良いじゃないか。小説を書く自由は誰にでもあるし、小説を書くのは自由だ。小説も自由だ。勝手に書いて、勝手に自己満足すれば良い」

「そういうわけにはいかねえよ」

「なんで？」

「もしまかり間違って、なんらかの間違いで、普通の小説を書いちゃったらどうするつもりだ？」

どうするも何も……。

「それならそれで良いじゃないか。普通の小説ってのは、つまり純文学ってことだろう？ 純文学の書けるヤツがわざわざライトノベルを書く必要もない。純文小説は評価され、キミはハッピー。めでたしめでたし、で終わりだ」

僕が言うと、しかし友人は「分かってねえなあ」と返した。

「俺はライトノベルが書きたいんだよ」

「それはさっき聞いた。でもなんでわざわざライトノベルなんだ？ 他の形式というか、文章作法はいくらでもあるだろうに」

なんでわざわざ、評価されにくいものを選ぶんだ、と僕は聞いた。

友人はあっさりと。

「好きだから」

と答えた。

「陳腐な物語が好きだから、軽い文章が好きだから、無駄な会話が好きだから、意図のない描写が好きだから、察する必要がないのが好きだから、人間味の無さが好きだから、毒にも薬にもならないのが好きだから、リアリティのなさが好きだから、カッコイイだけの主人公が好きだから、理由のないハーレムが好きだから、馬鹿笑いでできるだけのコメディが好きだから――

――だから俺は、ライトノベルが書きたいんだ」

恥ずかし気もなくそう言って、友人は笑った。

なるほど、確かにそれはもっともな理由である。好きという感情は、何よりも最優先の行動理由となる。

好きだから。

そんなことも忘れていた自分が恥ずかしい。

「それにさ」

友人は付け加えるように言った。

「さっきお前は小説が自由だと言ったけれど、それよりも自由なモノがこの世にはある」

「なんだ？」

「ライトノベルさ」

両手を広げて語る友人はまるで、いっばいに翼を広げ、今にも飛び立ちそうにすら見えた。

「ライトノベルは小説よりも自由だ」

「それは不思議な言葉だな。ライトノベルだって小説だろうに」

「そりゃどうかな。小説には定義があるが、ライトノベルには定義がない。定義がないってことは、どこまで行ってもそれはライトノベルってことだ。小説の中にライトノベルがあるんじゃない。ライトノベルの中に小説があるんだ」

「そら随分と壮大な話だな」

「ああ、壮大さ。小説は広大に広がるこの空みたいなもんだ。自由な空に純文学と言う名の雲が浮いてやがる。その雲を見て、やれ、あれが綺麗だ。やれ、あれが趣きがあるだ。と真面目な奴らは話しているわけだな」

「確かに。しかし、純文学が雲なら、ライトノベルは何だ？ 鳥か？」

僕の質問に少し考え、しかし最初から答えは決まっていたかのように友人は答えた。

「いや、宇宙だ」

「そらまた遠いね」

「言っただろう？ ライトノベルは小説よりも自由なんだ」

どうやら、その論を崩す気はないらしい。友人は続けて。

「雲を見れば明日の天気分かるが、たまには重い望遠鏡を持って、星を眺めてみるのも良い」

「それは僕に言っているのかい？」

僕は基本的に世に言われる純文学というモノしか読まないのだけれども。まあ、これだけ言うのだ。たまには遠い星に、思いを馳せてみるのも良いのかもしれない。

小説を読むのも、また自由だ。



時間ももう遅いと、友人とバス停に向かう。日本大学芸術学部文芸学科に入って数ヶ月。僕は未だに、自分のやりたいことに見当が付かないでいた。

そういう意味では、この友人が羨ましい。

「書けたら読ませてくれ、キミのライトノベル」

「ああ良いぜ、お前の頭をライトなノベルにしてやるよ」

そう言って、文筆家の卵たちは今日も少しだけ成長しようとしていた。

written by 城野伊織



何事も前向きにね☆



プレッシャーを感じます



またまたあっ！

お し ま い ！

## 作家紹介

竹見名央

フィッツロビンと無垢な白百合

幻想小説を得意とする。

わけのわからない発想で周囲を翻弄する人物。

ひかり

不撓不屈

心の繊細さ、移り変わりを丁寧に描く。

一人称小説が得意。

Q

レストラン・グラフィティ

人間の心境、またその関係を描く作品を執筆する。

純文学を志向している。

## 絵師紹介

えりな

雪見ダイフク

篠屋

表紙イラスト

えりな

## 編集部

松原葵

紀谷実伽留  
齊藤裕之介  
△ t (でるたていー)  
木村千佳

## あなたの気に入った作品に投票しよう！

「月刊エトランゼ」を手にとっていただきありがとうございます。  
当サークルでは、より良い雑誌作りを目指し、今後の改善、内容充実を図るため、  
読者の皆様に、作品の人気投票を行っております。  
下記リンクにアクセスしてご回答ください。ご協力よろしくお願い申し上げます。

月刊エトランゼHP  
<http://kmit-monthly.weebly.com/>

2014.2/25 第3刊  
2014.3/20 第4刊  
電子書籍で随時配信!

# 月刊イトランゼ

ライトノベルフリーペーパー

紙媒体で限定小数部刷版してます!  
お求めの方は日芸キャンパス内、または  
kmit.kemmy@gmail.comにご連絡ください

月刊誌公式サイトで情報配信中!  
<http://kmit-monthly.weebly.com/>



現在3タイトル人気投票中! 投票はQRコードからアクセス!

- ①フィッツロビンと ②レストラン・ ③不撓不屈  
無情な白百合 グラフィティ



## 協力者求ム!

KMITでは、作家、編集者、絵師を随時募集しています。  
KMITの運営スタッフには、部員として活動している人も、  
協力スタッフとしてお手伝いされている人もいます。少しでも当サークルに興味を持たれた方は、  
お気軽にHPや上記メールアドレスからご連絡ください。お待ちしております!

## 月刊エトランゼ 第三刊

<http://p.booklog.jp/book/83019>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行 : 日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT (ケミット)

URL : <http://kmit.weebly.com/>

小説執筆 : 竹見名央/ひかり/Q

イラスト : えりな/雪見ダイフク/篠屋

表紙 : えりな

編集 : 紀谷実伽留/齊藤裕之介/△t (でるたていー) /木村千佳

発行者 : 松原葵

月刊エトランゼ HP

<http://kmit-monthly.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83019>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83019>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ